

住宅平面における公室と子ども室の構成の変化に関する研究

内田文雄 (感性デザイン工学専攻) 中川あかり (感性デザイン工学専攻)

A study on the changes in the composition of public rooms and children's rooms in house plan.

Fumio UCHIDA (Professor, Graduate School of Science and Engineering)

Akari NAKAGAWA (Graduate student, Graduate School of Science and Engineering)

This research aims at acquiring the knowledge about the change occurred to the composition of public rooms and child rooms in housing plan. The composition of a public room and a children's room and the change of relationship in a house plane are analyzed from the viewpoint of a family's communication for the example published at the house magazine from the 1960s to 2012.

Key Words: housing plan, housing magazine, children's room, classification

1. 序論

1.1 研究の背景と目的

平成 19 年度に内閣府が発表した「国民生活白書」によると、家族が家庭内で過ごす時間は年々減少傾向にあるという。特に、家族の起床在宅時間の減少や朝晩の食事の孤食化が問題視されており、平成 21 年に行われたベネッセ子供生活実態基本調査では、子どもの携帯情報端末の所持率が過去最高になり、それらの機器は主に子どもの自室で使用されているとの報告がなされた。家族間の交流時間の減少は家族関係にも変化をもたらし、ひいては住宅内の家族の交流空間のあり方に変化を与えているのではと推測した。住宅平面における子ども室と家族の交流空間の変化をとらえ、分析することで年代ごとの特徴と手法を獲得する事は今後の住宅設計において大きな課題である。本研究では戸建て住宅における家族の交流に配慮した空間に関する指針を得る事を目的とし、家族の交流という視点から住宅平面における公室と子ども室の構成の分析を行い、それらの推移の調査を行った。

1.2 研究方法

本研究では 1962 年から 2012 年までの雑誌掲載住宅を対象に、住宅平面における公室、子ども室の構成の変化と公室・子ども室の関係性の変化の分析を

行う。公室の構成では居間 (L)、食堂 (D)、台所 (K) の構成を中心に、応接室など接客空間の有無、階段の位置を図に表し分析を行う。子ども室の構成では子ども室の形態をパターン化し、その作られ方の変化の変遷を調査する。そして、公室・子ども室の関係性の変化の分析では子ども室と公室との動線関係や吹抜けによる上下階の位置関係から、子どもの私室と家族のパブリックな空間の親疎関係がどのように変化しているかを分析する。これらの要素を事例ごとに調査シートしてまとめ、各カテゴリーの分類を行う。それらの年代ごとの変化を整理し、最後にそこから得られる組み合わせパターンを抽出し類型化を行い、住宅平面における家族の交流空間の変化についての考察を行う。

1.3 調査対象

1962 年から 2012 年までの住宅雑誌掲載事例を研究対象として、住宅平面における公室、子供室の構成の変化と公室・子ども室の関係性の変化の分析を行う。研究対象の選定に関しては、一般読者を対象とした住宅雑誌である『ニューハウス』『新しい住まいの設計』(1960 年～) に掲載されたフリーアーキテクト、工務店、及びハウスメーカーによる作品の中から事例を収集した。これらの住宅作品は施主それぞれの価値観やライフスタイルが反映されており、年代ごとの家族観や住まい方の特徴が反映されてい

ると言ってもよい。収集した 2079 事例の中から以下の条件の下、調査対象となる事例を選定した。①核家族世帯であること②一室以上子ども室が存在すること③110~160 m²ほどの床面積であること(各年代の事例の平均延べ床面積より) その結果、50 年間で 371 事例集まり、これらを研究対象とした。

2. 事例分析

家族の交流空間が平面上にどのように構成されているのか、その変化を公室と子ども室の関係性から考察するために、事例ごとの「LDK の構成」、「階段の構成」、「客室の構成」、「子ども室の形態」、「子ども室と動線の関係」、「子ども室と LDK の関係」の 6 カテゴリーを以下の表の分類に型分けした (Table 1)。

2.1 カテゴリー別年代推移

(1) LDK の構成

家族のパブリックな交流空間である LDK の構成を居間・食堂・台所の位置関係から型分けし、その推移をみる (Figure1)。なお、ここでの一体とは同室内に機能が共存している状態を指し、独立は完全に別室に機能がある状態、隣接は一部が壁面などで遮られている状態を指す。

①、⑤は 1960 年代に特に多く、全体の 7 割以上を占める。1970 年代においても居間と食堂が独立している事例は半数以上を占め、初期においては団欒と食事の機能は分離していた事がうかがえる。③、⑧、⑨といった居間と食堂が一室化した事例は 1970 年代を境に増加し、1980 年代になると約 8 割の事例が居間食堂一室型となっている。しかし、⑧、⑨が多数派であり、調理空間は独立させるか、食堂とカウンターのように区切る事で気配のみ感じることのできる事例が多く見られる。1990 年代になると③が約 5 割を占め、居間・食堂・台所の一室化が定番化していることが分かる。また、2000 年以降の事例では LDK はほぼ③の形態をとるようになり、これらから LDK は年代を追うごとにオープンな空間と変化し、近年では LDK はほぼ一室化していることが明らかとなった。

(2) 階段の構成

住宅平面における階段の構成を LDK との関係から型分けし、その推移をみる。階段室や玄関ホールなどで LDK と完全に分離している階段を階段独立とし、居間・食堂と一体化した場合を階段一体とした。また、平屋建ての場合は階段無しとした。1990 年代までは (I) が 7 割以上を占めていたが、2000

年代以降は (II) が 7 割を越し、居間と階段が一体となった平面が主流となっている。それにより、上下階の移動が可視化され、より上下の動線がオープンになっていることが明らかとなった。

Table1 カテゴリー別 分類表

カテゴリー	分類
LDKの構成	① 居間・食堂・台所独立
	② 居間・食堂・台所隣接
	③ 居間・食堂・台所一体
	④ 居間・食堂独立 食堂・台所隣接
	⑤ 居間・食堂独立 食堂・台所一体
	⑥ 居間・食堂隣接 台所独立
	⑦ 居間・食堂隣接 食堂・台所一体
	⑧ 居間・食堂一体 台所独立
	⑨ 居間・食堂一体 食堂・台所隣接
階段の構成	(I) 階段独立
	(II) LDK・階段一体
	(III) 階段無し
客室の構成	(i) 客間独立
	(ii) 客間併用
	(iii) 客間隣接
	(iv) 客間一体
	(v) 客間無し
子ども室の形態	① 独立した個室
	② 独立した個室 分散
	③ 独立した個室 家具で分断
	④ 独立した個室 主寝室と接続
	⑤ 共有型 共有
	⑥ 共有型 将来独立
	⑦ ロフト型
	⑧ 個室+勉強スペース
	⑨ 共有+勉強スペース
	⑩ 将来独立+勉強スペース
⑪ ロフト型+勉強スペース	
⑫ 複合	
子ども室と動線の関係	① 玄関から直通
	② LDKを経由
	③ 台所を経由
	④ 主寝室を経由
子ども室とLDKの関係	(1)別階型 完全独立
	(2)別階型 子ども室が吹抜けてLDKと接続
	(3)別階型 廊下が吹抜けてLDKと接続
	(4)別階型 階段ホールが吹抜けてLDKと接続
	(5)別階型 多目的空間が吹抜けてLDKと接続
	(6)別階型 ロフト型
	(7)別階型 勉強スペースが吹抜けてLDKと接続
	(8)同階型 廊下による分断
	(9)同階型 建具による分断
	(10)同階型 LDKの一部
	(11)別階型 独立+子ども室とLDKの吹抜け接続
	(12)別階型 階段ホール+子ども室とLDKの吹抜け接続
	(13)別階型+同階型 独立+建具による分断

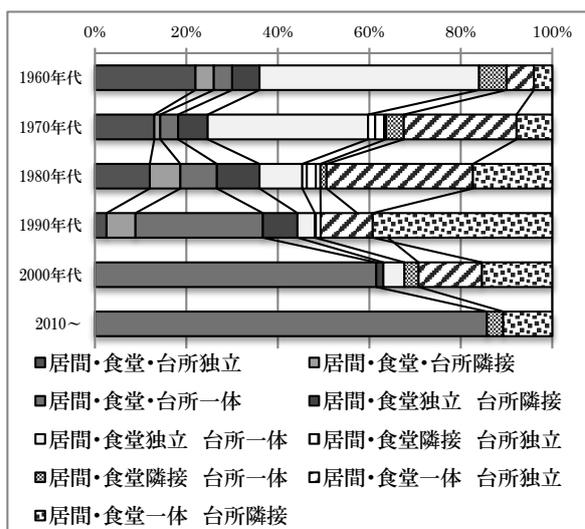


Figure1 LDK の構成

(3) 客室の構成

応接室、客室として使用されている室の型分けを

行い、その推移をみる。平面図に室名が明記されていない場合は、設計趣旨より応接専用の空間であると判断した。1970年代までは、7割以上の事例で客室を有していたが、1980年代以降は一転してほとんどの事例で客室は見られなくなった。代わりに、居間に和室が接続する事例が多く見られるようになり、簡易な応接空間や居間の一部、趣味の空間などといった多目的な空間へと転換したと考えられる。

(4) 子ども室の形態

子ども室の形態の型分けを行いその推移をみる (Figure2)。個室を一人で使用する場合を独立した個室とし、複数人で一室を使用する場合を共有型とする。また、居間などに付属するロフトを子ども室とする場合をロフト型とし、別途勉強などを行うスペースを設けた場合を勉強スペース型とした。全体を通して①が主流であるが、1980年代から⑤、⑥の共有型が出現し、子どもの成長と共に部屋の用途を可変にしようという意図が見られる。また、2000年代以降では⑦、⑧、⑨、⑩、⑪といった多様な子ども室が見られるようになり、子ども室が多様化していると言える。また、これらの子ども室の形態は居間に付随するなど LDK との繋がりが強く、より LDK 空間と子ども室を接続させようとする事例が増加しているといえる。

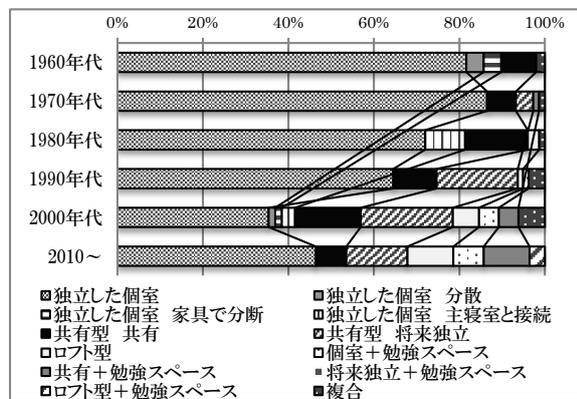


Figure2 子ども室の形態

(5) 子ども室と動線の関係

玄関から子ども室に至る動線を型分けし、その推移をみる。どの室も経由せず、玄関から直接子ども室に行けるものを[1]玄関から直通とし、LDKを経由するものを[2]とした。1990年代までは[1]が主流であり、1980年代まではおよそ8割の事例で[1]が採用されている。しかし、[2]の型は年代を追うごとに増加し、2000年代以降は[2]が6割を越す多数派となっている。これは階段の LDK との一体化と連動していると推測され、公室を経て子ども室に行くので、家族間の交流が自然と生じると考えられる。

(6) 子ども室と LDK の関係

上下階、あるいは同階にある LDK 空間と子ども室がどのような関係にあるかを型分けし、その推移をみる (Figure3)。1980年代までは (1) の上下階が完全に分断されている型が8割以上を占めていたが、1990年代から徐々に吹抜けを介して上下階が接続されるようになった。1990年代では主に子ども室などが接続する廊下や階段ホールなどといった動線部分が接続している型が多く、(3)、(4)、(5)が全体のおよそ2割を占めている。しかし、2000年代以降は(6)ロフト型などの増加により LDK と子ども室が直接吹抜けによって接続する事例が増加傾向にあると見られる。1980年代から2010年以降にかけての(2)、(6)、(11)、(12)の全体に占める割合をみると、10%、12%、21%と微増しており、吹抜けを介させる事で上下階に分かれた公室と子ども室に繋がりを持たせようという動きがあることが推測される。

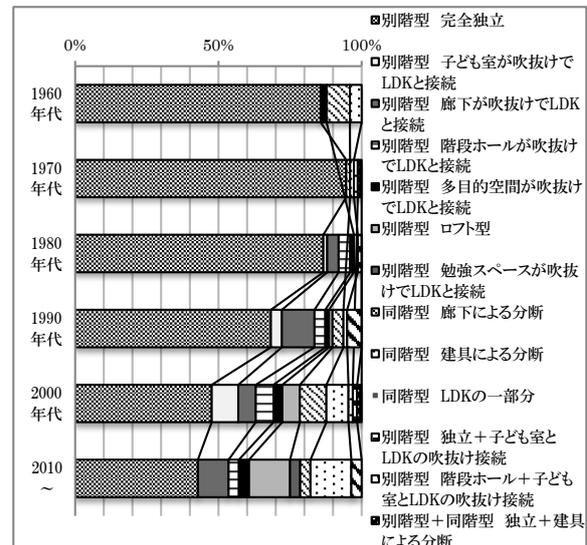


Figure3 子ども室と LDK の関係

2.2 類型表による公室と子ども室の構成推移

6 カテゴリーの分類を組み合わせることによって得られるパターンを整理し、A~Q の 17種類に類型化した (Table2)。その結果、50年間での推移の変化を大きく4期に分けることができた (Figure4)。

1期 (1960年代前半~1960年代後半) : A、B、C型で構成されている。平面上の各機能の独立性の高い、接客を重視した構成であると言える。2期 (1970年代前半~1980年代前半) : 公室の形態が多様となり、接客重視から家族の交流重視へと変化する転換期であると考えられる。3期 (1980年代後半~2000年代前半) : B~L型の多様な型の共存する時期である。子ども室や動線のオープン化の時期である事が伺える。また、後半では吹抜けによって上下階を繋ぐ型も出現し、公室と上下階を接続する傾向が見られ始

Table 2 類型表

型	LDKの形態	階段の形態	客間の有無	子ども室の形態	子ども室と動線	子ども室とLDKの関係	型の特徴
A	⑤	(I)	有	①	[1]	(1)	食堂・台所が一体化しているが、居間・客室は独立した応接空間重視の型
B	①④	(I)	有	①	[1]	(1)	居間・食堂・台所の各機能が個室化した、独立性の高い型。応接空間を有する。
C	⑧⑨	(I)	有	①	[1]	(1)	居間・食堂が一体化しており、開放的な公室空間を持つ型。応接空間を有する。
D	③⑨	(I)	無	①	[1]	(1)	上下階のつながりの無いオープン化した公室空間を有する
E	③⑨	(I)	無	⑤⑥	[1]	(1)	オープン化した公室空間を有する。共有化した子供室を有する。
F	③⑨	(II)	無	①	[2]	(1)	オープン化した公室空間を有する。LDKを経由した動線を持つ。
G	③⑨	(II)	無	⑤⑥	[2]	(1)	オープン化した公室空間を有する。共有型の子ども室までLDKを経由する。
H	③⑨	(I)	無	⑤⑥	[1]	(2)(3)(4)(5)	公室空間と共有型の子供室が吹抜けで介在されている。
I	③⑨	(I)	無	①	[1]	(2)(3)(4)(5)	公室空間と個室型の子供室が吹抜けで介在されている。
J	③⑨	(II)	無	⑤⑥	[2]	(2)(3)(4)(5)	公室空間と共有型の子供室が吹抜けで介在されており、LDK経由の動線を持つ。
K	③⑨	(II)	無	①	[2]	(2)(3)(4)(5)	公室空間と個室型の子供室が吹抜けで介在されており、LDK経由の動線を持つ。
L	③⑨	(II)	無	⑦	[2]	(6)	公室空間に付属したロフトを子ども室として利用している。
M	③⑨	(II)	無	⑧⑨⑩⑪	[2]	(1)	子ども室の他に、公室空間に付属した勉強スペースを有し、LDKを経由の動線を持つ。
N	③⑨	(I)	無	⑧⑨⑩⑪	[1]	(1)	子ども室の他に、公室空間に付属した勉強スペースを有する。
O	③⑨	(II)	無	⑧⑨⑩⑪	[2]	(2)(3)(4)(5)	勉強スペースを有し、公室空間と子ども室が吹抜けで介在されている。LDK経由の動線を持つ。
P	③⑨	(I)	無	⑧⑨⑩⑪	[1]	(2)(3)(4)(5)	勉強スペースを有し、公室空間と子ども室が吹抜けで介在されている。
Q	③⑨	(II)	無	①	[2]	(8)(9)	オープンな公室空間と子ども室が同じ階に存在し、建具のみで区切られている。

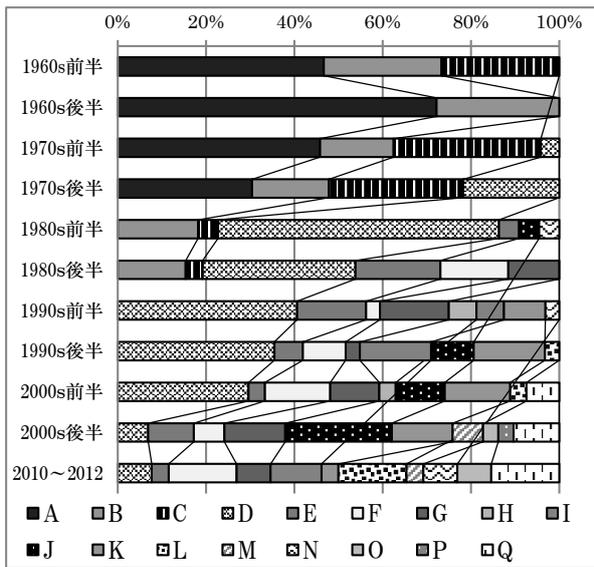


Figure4 公室と子ども室の構成の推移

める。4期（2000年代後半～）：3期に加え、勉強スペースを有する型が出現し、最も多様な型が存在する時期である。またロフト型が顕著に増加しており、子ども室と公室が断面的な繋がりを持つようになってきている事が伺える。これらの分析から、公室と子ども室の構成は年々多様化し、LDKを始めとした平面的な繋がりから、子ども室、階段、吹抜けを経て、断面的な繋がりへと変化していると推測できる。

3. まとめ

本研究では、50年間の住宅平面における公室と子ども室の構成の変化を家族の交流空間の視点から分析を行った。その結果、公室と子ども室の構成の年代変化は4つの時期に区分できることが分かった。1期から2期にかけて、公室が独立性の高い接客重視の構成から一室化した家族重視の構成へと変化し、3期では共有型の子ども室の出現や上下階の動線の変化が見られ、4期では子ども室の多様化に加えて、公室と子ども室の吹抜けによる断面的な繋がりが見られた。以上より、公室と子ども室の構成は平面的なオープン化から断面的かつ多様な構成へと変化を遂げていることが明らかとなった。

参考文献

- 1) 高橋博久：「住宅誌の掲載事例にみる戦後40年間の子居室の推移」日本建築学会学術講演梗概集 1987
- 2) 本間博文・亀井紀子：「住宅平面に投影された親子の交流」日本建築学会計画系論文集 2000

(平成26年1月31日受理)